

令和元年6月21日現在

機関番号：24701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11633

研究課題名(和文) 直腸がん患者の就労支援のためのグループ介入プログラムの開発と評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of group intervention program for working support of postoperative rectal cancer patients

研究代表者

辻 あさみ (TSUJI, ASAMI)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号：60310794

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：直腸がんの手術療法で低位前方切除術(以下LARと略する)を受けた患者は、術後に排便機能障害を生じることが多く、術後のQOLは低下する。直腸がん患者への教育モデルは日本においてまだ確立されていない。そこで本研究は、LAR術後で排便機能障害のある患者に教育的支援(就労支援を含む)と情緒的支援を含むグループ介入プログラムを開催した結果、患者の知識とQOLの向上がみられることが明らかになり、がんサバイバーシップを維持するための支援のひとつとしての有効性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

直腸がんの手術療法で低位前方切除術(以下LARと略する)を受け排便機能障害を生じた患者への支援は、これまで、このような患者への支援は生活指導が中心で、就労支援も含めQOLに関する具体的な介入はあまり行われてこなかった。本研究の結果、患者の知識とQOLの向上がみられることが明らかになり、がん患者におけるQOLに関連するがんサバイバーシップを維持するための支援のひとつとして、グループ介入プログラムの有効性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to clarify the effectiveness of patient group meetings for the LAR postoperative patients with defecatory dysfunction. A patient group meeting for the patients after LAR has positive health effects on the QOL of diarrhea. The results suggest the importance of patient group meeting to survival related to QOL of such patients.

研究分野：がん看護学

キーワード：排便機能障害 直腸がん患者 低位前方切除術 QOL 患者教育 グループ介入

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

直腸がんの手術療法で低位前方切除術(以下LARと略する)が実施されるようになり、肛門温存率が向上した。しかし、LARを受けた患者は、肛門が温存されるかわりに術後に排便機能障害を生じることが多く、術後のQOLは低下する¹⁾。これまで平成23年度~平成25年度は科学研究費助成事業の基盤研究Cにおいて、「大腸がん患者のサバイバーシップを高めるためのセルフヘルプグループプログラムの開発」に取り組んできた。その結果、LAR後患者に必要な支援は、排便機能障害に対するセルフケア能力の再獲得にむけた支援と、就労を継続するための支援の必要性が明らかとなった。研究開始当初の目的は、これまでの研究を基盤に、保坂らが開発したがん患者の就労リングを参考に、LAR後患者の術後のセルフケア能力の再獲得に向けた支援と就労支援を目的とする介入プログラムを開発し、その効果を検証することだった。しかし、LAR後の排便障害は長期間持続することや、化学療法などの治療に伴う症状も重複することで就労を断念する患者もいた。そのため就労支援を含めたQOLに関する具体的な介入方法を再検討した。その結果、先行研究よりLAR後に排便機能障害のある患者には、教育的支援や情緒的支援が必要であることが明らかになった²⁻⁵⁾。

そこで本研究は、LAR術後で排便機能障害のある患者に教育的支援と情緒的支援を含む介入プログラムを開発し、その有効性を明らかにすることで、就労支援を含むがん患者におけるQOLに関連するがんサバイバーシップを高める支援を検討する一助とすることを目的とした。

2. 研究の目的

本研究は、LAR術後で排便機能障害のある患者に教育的支援と情緒的支援を含むグループ介入(以下患者交流会とする)を開催し、その有効性を明らかにし、就労支援を含むがん患者におけるQOLに関連するがんサバイバーシップを高める支援を検討する一助とすることを目的とした。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン: 前向き縦断研究で、研究期間は2015年1月から10月とした。

2) 患者交流会

直腸がん患者への教育モデルは日本においてまだ確立されていない。そのため、本研究における教育内容は、Fawzy⁶⁾および福井ら⁷⁾の乳がん患者の教育モデルを参考にした。講義以外にも自分達の体験や思いを交換する場としてグループ討議を行うようにした。患者交流会は3回実施し、対象者は自由に参加できるようにした。(表1)

本研究は、和歌山県立医科大学倫理委員会の承認(承認番号1528)を受け実施した。

3) 対象者

対象者は2011年から2014年にLARを受けた患者84人を選択した。この対象者に研究依頼の文書を郵送し、30人から同意が得られた(同意率35.7%)。本研究では介入前後に回答が得られた26名を分析対象とした。(図1)

4) 調査方法

自記式質問紙による調査を1回目の会の1か月前(プレテスト)および3回目の会の5か月後(ポストテスト)に行った。調査項目は以下のように設定した。

属性: 年齢、性別、手術時期、化学療法・放射線療法の実施の有無。

知識と情緒：知識は「排便機能障害の知識」「対処方法の知識」「がんの知識」「就労の知識」について、情緒は、「がんに伴う恐怖」「孤独感」「安心感」「日常生活に対する自信」について、Visual Analogue Scale (VAS) を用いて測定した。

排便機能障害：佐藤が開発した排便機能評価尺度 ver.2 を用いて測定した。この尺度は「便の保持と排泄」「つきまとう便意」の2つの下位項目から構成されており、得点が高いほど障害の程度が重い。

QOL：QOLはEuropean Organization for Research and Treatment of Cancer Quality of life questionnaire (EORTC QLQ-C30 日本語版) を用いて測定した。この尺度は、Global health status/QOL(1項目)および機能スケール Function scales(5項目：PF 身体、RF 役割、EF 認知、CF 情緒、SF 社会的機能)と症状スケール Symptom scales(9項目：FA 疲労、NV 嘔気、PA 痛み、DY 呼吸困難、SL 睡眠、AP 食欲不振、CO 便秘、DI 下痢、FI 経済難)から構成されており、機能スケールは、点数が高いほどその質が高く、症状スケールは、得点が高いほどその症状がないことを示す。

表1. 介入プログラム内容

| 項目 | 内容 | 担当者 | 時間 |
|----|---|--|-----|
| 知識 | <ul style="list-style-type: none"> * 排便機能障害や対処方法 * がんの治療について * 大腸がんと排便障害 * 緩和ケア * 就労 <p style="text-align: center;"><u>講義形式で実施</u></p> | 医師 看護師 社会保険労務士 研究者 がん看護専門看護師 | 90分 |
| 情緒 | <ul style="list-style-type: none"> ・小グループの語り合い ・具体的な対処方法 ・不安等思いの共有 <p><u>患者6~7人のグループになり、研究者がファシリテーターとなって自由に語る場を設定</u></p> | 看護師 社会保険労務士 研究者 | 60分 |

5) 分析方法

対象者を、3回の患者交流会に1回でも参加した18人(参加群)と、アンケートに協力できなかったが患者交流会には参加できなかった8人(非参加群)に分類した。参加群と非参加群における介入前後の比較には、対応のあるt検定を用いた。また、介入の有効性を明らかにするために参加後の得点を従属変数とし、参加回数と参加前の得点および年齢を独立変数として、重回帰分析(強制投入法)を行った。さらに、QOLの変化と排便機能障害との関連性を検討するためにSpearmanの順位相関係数を求めた。

解析にはSPSS.Ver23を用い、有意確率は5%未満とした。

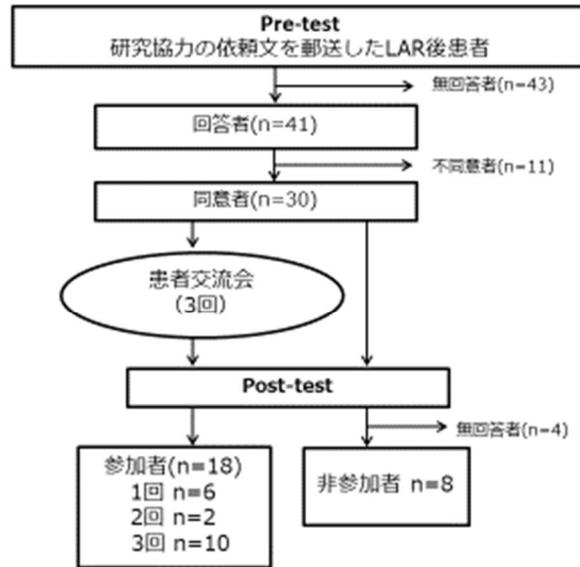


図1：研究プロセス

4．研究成果

患者交流会には、1回目26人中16人（参加率62%）、2回目12人（46%）、3回目12人（46%）が参加した。どの項目も参加群と非参加者の2群間に有意な差はみられなかった。

知識の4つの項目、情緒の「安心感」と「日常生活に対する自信」の2項目は参加群で有意に増加した。非参加群ではいずれの項目も有意な変化はなかった。

排便障害は、2項目とも2群間に有意な差はみられなかった。

Global health status/QOL(1項目)およびFunction scales(5項目)では、両群とも有意な変化はみられなかった。Symptom scalesでは「DI下痢」の得点が有意に低下した。

重回帰分析（強制投入法）の結果、参加回数が独立して関連した項目は、知識の「排便機能障害の知識」「対処方法の知識」「がんの知識」の3つの要因、QOLの「FA疲労」と「DI下痢」の2つの要因であった。標準化回帰係数は、知識の3項目が正で、QOLの2項目が負であった。

「Global health status/QOL(1項目)」は「PF身体」と「SL睡眠」「DI下痢」に有意な相関がみられた。「DI下痢」は「Global health status/QOL」と「SF社会的機能」と有意な相関がみられた。「FA疲労」は「RF役割」と「CF情緒」に有意な相関がみられた。排便機能障害は、いずれのQOLとも有意な相関はみられなかった。

LAR後に排便機能障害のある患者を対象に教育的支援と情緒的支援を含むグループ介入として患者交流会を3回開催した結果、患者の知識とQOLの向上がみられることが明らかになり、がんサバイバーシップを維持するための支援のひとつとして患者交流会の有効性が示唆された。

【文献】

- 1) Ziv Y. et al. : Low anterior resection syndrome (LARS): cause and effect and reconstructive consideration. Tech Coloproctol. 2013;17:151-162.
- 2) 辻あさみ 他：低位前方切除術後患者の排便機能障害の実態と克服するための指導，和歌山県立医科大学保健看護学部紀要，vol.3, 5-15, 2007

- 3) 辻あさみ 他：低位前方切除術後患者に排便機能障害が及ぼす心理学的影響とその対処，日本医学看護学教育学会誌，vol.18, 34-38, 2009
- 4) 辻あさみ 他：低位前方切除術後患者の排便機能障害の対処に影響する病気の受け止め方の相違，日本医学看護学教育学会誌，vol.20, 14-19, 2011
- 5) Tsuji A. et al. : Clues to Supporting a Patient who Underwent a Low Anterior Resection Operation, *International Journal of Nursing & Clinical Practices*, 2015
- 6) Fawzy FI. et al. : A structured psychiatric intervention for cancer patients. I. Changes over time in methods of coping and affective disturbance. *Arch Gen Psychiatry*. 1990;47:720-5.
- 7) Fukui S. et al. : Participation in psychosocial group intervention among Japanese women with primary breast cancer and its associated factors. *Psychooncology*. 2001;10:419-27.
- 8) 佐藤正美：直腸がん前方切除術後の排便障害を評価する「排便障害評価尺度 ver.2」の開発 日本ストーマ排泄リハビリテーション学会誌，Vol. 26, No. 3, 37-47, 2010
- 9) Aaronson NK. et al. : The European Organization for Research and Treatment of Cancer QLQ-C30: a quality-of-life instrument for use in international clinical trials in oncology. *J Natl Cancer Inst*. 1993;85: 365-76.19.
- 10) Johnson J. : The effects of a patient education course on persons with a chronic illness. *Cancer Nurs*. 1982;5:117-23
- 11) Björneklett HG. et al. : Long-term follow-up of a randomized study of support group intervention in women with primary breast cancer. *J Psychosom Res*. 2013;74:346-53.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

Asami Tsuji, Miyoko Nakayama, Katsunari Takifuji他、Effectiveness of Patient Group Meetings for Postoperative Patients with Defecatory Dysfunction. *International Journal of Nursing & Clinical Practices*, 査読有、vol.4、2017、260
DOI: <https://doi.org/10.15344/2394-4978/2017/260>

〔学会発表〕(計1件)

低位前方切除術後患者のQOLと排便障害の術後経過年数による横断比較、第34回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会、2017

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：瀧藤 克也

ローマ字氏名：(TAKIFUJI, katsunari)

所属研究機関名：和歌山県立医科大学

部局名：医学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 00254540

研究分担者氏名：山口昌子

ローマ字氏名:(YAMAGUTI, masako)

所属研究機関名:和歌山県医科大学

部局名:保健看護学部

職名:講師

研究者番号(8桁):00554536

研究分担者氏名:堀田 司

ローマ字氏名:(HOTTA, tsukasa)

所属研究機関名:和歌山県立医科大学

部局名:医学部

職名:博士研究員

研究者番号(8桁):50244744

研究分担者氏名:鈴木 幸子

ローマ字氏名:(SUZUKI, yukiko)

所属研究機関名:四条畷学園大学

部局名:看護学部

職名:教授

研究者番号(8桁):60285319

研究分担者氏名:森岡 郁晴

ローマ字氏名:(MORIOKA, ikuharu)

所属研究機関名:和歌山県立医科大学

部局名:保健看護学部

職名:教授

研究者番号(8桁):70264877

研究分担者氏名:上田伊津代

ローマ字氏名:(UEDA, itsuyo)

所属研究機関名:和歌山県立医科大学

部局名:保健看護学部

職名:講師

研究者番号(8桁):90530709

(2)研究協力者

研究協力者氏名:中山美代子

ローマ字氏名:(NAKAYAMA, miyoko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。